短期大学生による話し言葉と書き言葉の認識と実態について

皆川 晶

On the recognition and actual situation of language in writing and speaking used by college students

Aki Minagawa

Abstract

Students of nursery department practice at the nursery school or the kindergarten, aiming to become teachers of them. Every time when students go practicing there,they are pointed out their mistakes in the daybook that they could not distinguish between writing and speaking language. Knowing that they can not acquire the abilities of them, I am discouraged by the fact though they are learning them. This time before teaching I researched the actual situation in order to observe how they are conscious of writing and speaking ones. Moreover, On the distinction between writing and speaking language, I want to know what relation is there concerning their habitual reading and newspaper reading. And I would like to make use of teaching in my class.

Keywords : speaking language , written language, reading, newspapers

１、はじめに

保育科に所属する学生は、将来保育士や幼稚園教諭を目指している。その保育者の言動は子どもたちに大きな影響を与える。特に、耳を介して吸収する話し言葉の影響力は大きい。さらに、指導案や日誌、連絡帳など書くことも多く、保育者にとって話し言葉と書き言葉の区別がつくことは必須の条件となる。

学生が資格、免許を取るために保育所や幼稚園、施設などで実習をおこなっているが、実習巡回するたびに、実習先の先生から学生の書く実習日誌について、「話し言葉と書き言葉の区別がついていない」というご指摘を受ける。「国語表現法」の授業で話し言葉と書き言葉を教えているにもかかわらず、学生の身についていないことを知らされることとなり、気落ちしてしまう。授業の中では、さまざまな例を出して、区別がつくように指導してい

るのだが、やはり授業だけでは不十分なようである。話し言葉と書き言葉の区別がつかなければ、今後の勉学や将来に影響が出てくるため、入学した 4 月の時点で、学生たちにどの程度の区別がついているのかを把握したうえで、指導内容を検討することにした。

よって、話し言葉と書き言葉の区別に対する自覚や、話し言葉から書き言葉への修正の有無を問う調査を試みた。さらに、佐藤が「話し言葉が頻繁に使われるのは話し言葉と書き言葉の区別がつけられないためであろうし、その原因のひとつは本を読まなくなったことがあげられるのではないだろうか」（佐藤、2013、p96）と指摘しているように、話し言葉と書き言葉の区別と読書量との関係を知るために、読書や新聞閲読についても同時に調査した。

２、調査にあたって

①調査対象

近畿大学九州短期大学保育科１年生　７０名

②調査時期

平成 28 年 4 月中旬

③調査内容

（１）話し言葉と書き言葉の区別がついていると思いますか。

（２）話すときに相手と親しいか親しくないか、または、年齢や立場などによって、言葉遣いを変えていますか。

（３）文章などを書くときは、話すときと比べて言葉や表現を変えていますか。

（４）読書を習慣的にしていますか。

（５）この１年間を振り返って、だいたい何冊くらいの本を読みましたか。（雑誌・マンガ・教科書・参考書は除く）

（６）新聞を読みますか。どのくらいの割合で読みますか。

（７）次の下線部分の表現が書き言葉であれば〇を、話し言葉であれば書き言葉に書き換えてください。書き換える書き言葉がわからない場合は△を書いてください。（問題の 45 問は、ここでは省略し、「３、調査結果と考察（７）」に記載する）

※　質問の（２）は、その理由も問うた。理由は自由記述なので、回答欄に書かれたそのままの表現を用い記載した。

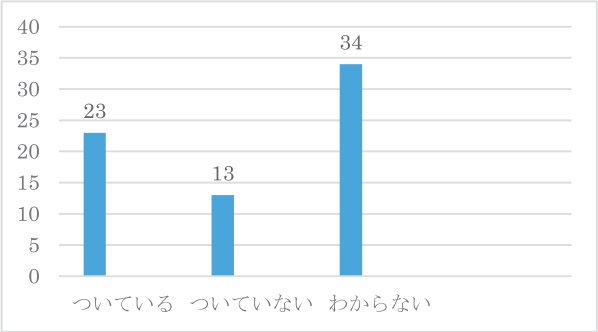
※　質問（７）は、普段学生が使用している言葉や、保育所や幼稚園での実習の際に使うであろう言葉を想定して問題を作成した。

３、調査結果と考察

集計にあたって、部分的な無回答があり、それは除外したため、集計対象人数は質

問ごとに変動している。

（1）話し言葉と書き言葉の区別がついていると思いますか。



話し言葉と書き言葉の「区別がついている」と答えたのは 32.8%であり、「区別がついていない」は 18.6%、「わからない」は 48.6%であり、約 7 割の学生が話し言葉と書き言葉の区別がつかない、あるいはわからないと答えた。しかし、小学校 5・6 年生の学習指導要領には、「話し言葉と書き言葉との違いに気付くこと」[1)]、中学校 2 年生の学習指導要領には、「話し言葉と書き言葉との違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きなどについて理解すること」[2)] と記載されているため、学生たちは小学校と中学校の国語の時間に、話し言葉と書き言葉について勉強しているはずである。それにもかかわらず、区別がつくという自覚のある学生が 3 割程度しかいないということは、勉強をした時には理解したのであるが、その後、文章を書くときなどに定着しなかったと推測される。

（2）話すときに相手と親しいか親しくないか、または、年齢や立場などによって、言葉遣いを変えていますか。

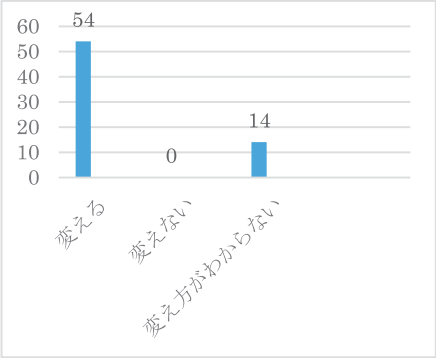
〈　変える　〉　　70 名

理由	人数
相手に失礼だから	19
常識だから	15
礼儀だから	13
年上の人には敬語を使う	12
相手に嫌な思いをさせたくないから	4
尊敬の気持ちを示すため	4
友達と敬語で話したら距離を感じるから	2
年上の人にタメロは使えないから	2
立場をふまえないといけないから	1

普段の話し方が変だから	1
親しくない人には誤解されそうだから	1
小さい子には汚い言葉は使ったらだめだと思う	1
上下関係は大事だから	1

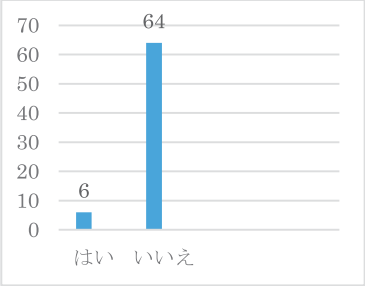
「言葉遣いを変えない」と答えた学生は一人もいなかった。「相手に失礼だから」「礼儀だから」「常識だから」「年上の人には敬語を使う」という相手への心遣いから、または相手の年齢や立場をわきまえて、言葉遣いを考えているようである。

（3）文章などを書くときは、話すときと比べて言葉や表現を変えていますか。



「変える」と答えたのが 79.4%、「変え方がわからない」が 20.6%である。つまり、文章を書くときには、書き言葉を使うということがわかっているということになる。「変え方がわからない」と答えた 14 名は、次の（4）「読書を習慣的にしていますか」という問いに、全員が「いいえ」と答えた。 この結果は、読書によって得られる語彙力の増加や国語力と関係があるのではないかと推測される。

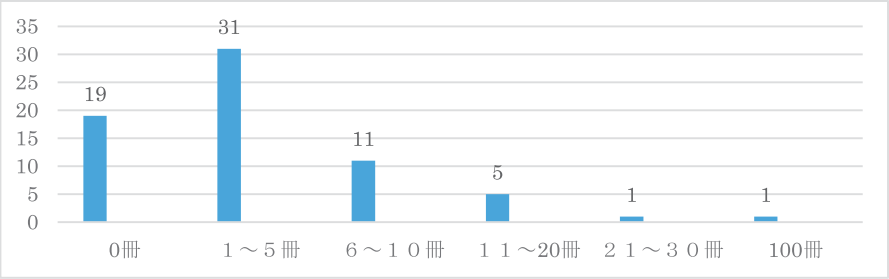
（4）読書を習慣的にしていますか。



約 9 割の学生に読書習慣がないことがわかった。学生生活実態調査によると、1 日

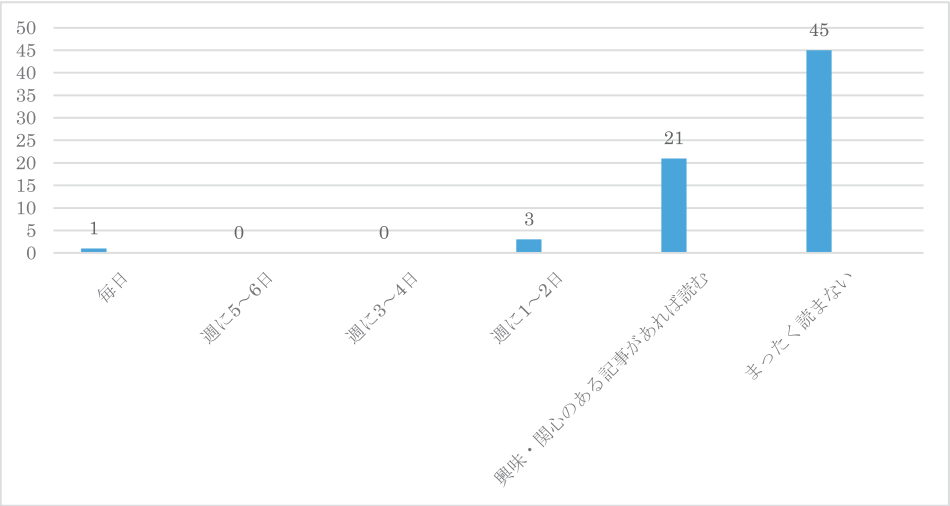
の読書時間は平均 28.8 分であり、「０」分は 45.2%[3] である。本学の学生には具体的に 1 日の読書時間を問うてはいないが、本学の学生だけが特別に読書習慣がないとは言い切れないといえよう。しかし、読書をしていないことは事実である。

（５）この１年間を振り返って、だいたい何冊くらいの本を読みましたか。（雑誌・マンガ・教科書・参考書は除く）



調査対象が 1 年生であり、過去の 1 年といえば受験勉強をしていた時期が含まれるので、通常よりは読書量が少ない 1 年間であると考えられる。まったく読んでいない学生は 27.9%もおり、1 カ月に 1 冊以下は 61.8%と多く、いくら受験時期を含むといえども本学学生の読書量の少なさが露呈した。上記（４）の問いで約 9 割の学生が「読書習慣がない」と答えたことと合致する結果となった。

（６）新聞を読みますか。どのくらいの割合で読みますか。



日本新聞協会の調査では「毎日」読むが 30.7%、「週に５～６日」が 5.7%、「週に

３～４日」が 17%、「週に１～2 日」が 19.3%、「それ以下」が 27.3%[4] であるが、本学の学生は「まったく読まない」が 64.3%、「興味・関心のある記事があれば読む」が 30%であり、新聞を定期的に読んでいるのはわずか 5.7%であった。読書同様、新聞閲読の習慣もないことがわかった。

（７）次の下線部分の表現が書き言葉であれば○を、話し言葉であれば書き言葉に書き換えてください。書き換える書き言葉がわからない場合は△を書いてください。

① チャリで通学してる。
② ブランコから落っこちそうで、やばかった。
③ 犬が急に飛び出したんで、超、びっくりした。
④ 先生の言うことをちゃんと聞いていない。
⑤ 子どもは好奇心旺盛なんだなあとゆう印象をもった。
⑥ いろんな子どもと関わっていきたい。
⑦ ぜーんぜん、子どもが話を聞いてくれない。どうしたら　いいかわからない。
⑧ この本は探していたものと、違かった。
⑨ やっぱり、私も行こう。
⑩ 注意した。でも、伝わらなかった。
⑪ 指導の仕方がわからなくて困った。
⑫ めっちゃ楽しいけど、マジで疲れた。
⑬ 楽しいっていうか、ぶっちゃけ責任が重いんで、やばい。
⑭ こんなことが起きないように気をつけます。
⑮ 午後は紙芝居とかした。
⑯ 熱が出ちゃってた。なので、風邪じゃないかと思う。
⑰ 2 人を同じグループにすることは、私的には、ありだと思う。
⑱ みんなが片付けないので、自分がやった。
⑲ お昼寝の時間に、おもちゃの整理をしとく。
⑳ 今、おやつを食べてます。
㉑ 時たま、メモするのを忘れる。
㉒ 花ちゃんは 1 人でシャツを着れるようになった。
㉓ 太郎君は初めてピーマンを食べれた。
㉔ 僕が補助に行かなきゃなりません。
㉕ 子どもたちがいっぺんにしゃべるから聞き取れない。
㉖ 今日、花ちゃんは遅れて来たっぽい。
㉗ もう少し入り口が広ければ、入りやすいのにって思った。

※　表の中にある数字は、それぞれの項目を答えた人数である。

※　話し言葉から書き言葉への修正として、文脈にあった望ましいと思われるものには、下線を引いている。望ましいと思われるが、漢字表記が間違っているものには、波線を引いている。

	修正前 **話し言葉**	修正なし ○ **書き言葉である**	修正あり **話し言葉　→　書き言葉**	修正あり △ **書き換えがわからない**	無回答
①	チャリ	3	自転車（66）	0	1
	してる	5	している（55） しています（6） した（1）、してます（1）	0	2
②	落っこちそう	5	落ちそう（51） 落ちてしまいそう（6） 落下（2） 落ちそうなの（1）	2	3
	やばかった	1	危なかった（34） こわかった（8） 大変だった（5） あせった（1）	16	5
③	飛び出したんで	4	飛び出したので（26） 飛び出してきたので（19） 飛び出してきて（4） 飛び出して（4） 飛び出したから（3） 飛び出してきたから（1） 飛び出してきたんで（1）	4	4
	超	3	とても（38）、すごく（14） かなり（1）、非常に（1）	2	11
	びっくりした	26	驚いた（33） びっくりしました（4）	2	5
④	ちゃんと	17	きちんと（37） しっかりと（8）	6	2
⑤	なんだなあ	11	なんだ（14）、だ（7） なのだ（4）、なんだな（4）	21	4

			だな（3）、なのだな（2）		
	ゆう	3	いう（62）	3	2
⑥	いろんな	13	いろいろな（31） さまざまな（8） たくさんの（7） いろいろ（2） たくさん（2）	5	2
⑦	ぜーんぜん	0	全く（39） 全然（28）	1	2
	どうしたら	43	どうすれば（15） どのようにしたら（3）	1	8
	いい	18	よい（24）、いいの（12） よいの（7）	3	6
⑧	違かった	15	違った（33） 違っていた（10） 異なった（1）、違う（1） 違うものだった（1）	5	4
⑨	やっぱり	20	やはり（38）	9	3
⑩	でも	21	しかし（36）、だけど（4） だが（3）、けれども（1）	2	3
⑪	わからなくて	44	わからず（8） わからなかったので（4） わからないため（1） わからなくなって（1）	6	6
⑫	めっちゃ	0	とても（46）、すごく（21） めちゃくちゃ（1）	1	1
	けど	22	けれど（25）、が（10） けれども（1）	2	10
	マジで	0	本当に（43）、とても（9） すごく（5）、ほんとに（3） かなり（1）、非常に（1）	6	2
⑬	っていうか	1	というか（36） というより（9） というよりか（2） っていうより（2） とは少し異なっているが（1）	11	4

			けれど（1）、ですが（1） と思うが（1）、が（1）		
	ぶっちゃけ	1	正直（20）、実際（9） 本当は（8）、とても（2） 正直なところ（1） 正直に言うと（1） 実を言うと（1） 本心は（1）、本当に（1） とにかく（1）、かなり（1）	17	6
	重いんで	2	重いので（48） 重くて（4）、重いから（2） 重たいので（1） 重いため（1）	5	7
	やばい	1	大変だ（12）、きつい（12） つらい（5）、嫌だ（2） 難しい（1）	29	8
⑭	こんな	14	このような（48） そのような（1） こういう（1） こういった（1）	3	2
⑮	とか	2	など（30）、などを（30） を（2）	4	2
⑯	出ちゃってた	2	出ていた（21） 出てしまった（11） 出た（9） 出てしまっていた（6） 出てた（5）、出ました（3） 出ていました（3） 出てしまいました（1） 出てました（3） あがっていた（1）	2	3
	なので	32	だから（16）、ですので（2） そのため（1）、ですが（1） 私は（1）	4	13
	じゃないか	12	ではないか（29）、だ（5） ではない（4）	5	6

			じゃない（２） なのではないか（２） ではないのか（１） なのでは（１）、では（１） だろう（１）、になった（１）		
⑰	私的	33	私（５）、個人的（３） 自分的（２） 私としては（２） 私が思う（１）	15	9
	あり	24	よいこと（５）、良い（３） 大丈夫（２）、いい（１） あってもよいこと（１） ありうること（１） ありがたい（１）、賛成（１） いい考えだ（１）	21	9
⑱	自分	17	私（44）	1	8
	やった	10	した（21）、片付けた（９） やりました（８） しました（４）、行った（４） 片付けをした（１） 片付けました（１）	5	7
⑲	しとく	3	しておく（47）、する（５） します（３）、行う（２） やっておく（１） しときます（１）	4	4
⑳	食べてます	24	食べています（38） 食べている（１） 食事します（１）	0	6
㉑	時たま	2	時々（48）、たまに（８） ごくまれに（１）、時に（１） 時折（１）	6	3
㉒	着れる	27	着られる（23） 着ることができる（10） 着用できる（１）	3	6
㉓	食べれた	16	食べられた（21） 食べることができた（13）	4	5

			食べた（５） 食べれるようになった（２） 食べられました（２） 食べることができる（１） 食べました（１）		
㉔	僕	13	私（39）	0	18
	行かなきゃ	3	行かなければ（35） 行かなくては（13） 行かないと（12） 行かねば（１）	1	5
㉕	いっぺん	2	一勢（21）、一度（18） 同時（９）、一緒（３） 一気（３）、同じ（１） 一回（１）	6	6
	しゃべる	8	話す（49）、話をする（３） 話し出す（２） 話しかける（１）	1	6
㉖	来たっぽい	0	来たようだ（14） 来たらしい（13） 来たみたい（８） 来たみたいです（５） 来たようです（５） 来ました（３）、来た（２） 来たかもしれない（１） 来たと思う（１） 来ていた（１） 来たよう（１）	10	6
㉗	って	2	と（51）、っと（３） など（２）、なあ（１）	5	6

⑤「なんだなあ」のように、自分の気持ちを述べるときに「～な」「～なあ」と書く学生が多い。「なんだなあ」を書き言葉と認識している学生は16.7%であるが、書き言葉への書き換えに「なんだな」「だな」「なのだな」としたのは16.2%もいた。「～だな」という表現が話し言葉であるという認識が薄いようである。

⑨「やっぱり」⑩「でも」⑫「けど」⑯「なので」⑱「やった」は、学生が日常会話でよく使用するので、書き換えが必要であるという認識が薄いようである。同様に学生

がよく使用する⑫「めっちゃ」「マジで」⑬「ぶっちゃけ」「やばい」㉖「来たっぽい」において、これらのことばを書き言葉であると認識している学生は、「めっちゃ」、「マジで」、「来たっぽい」は0名、「ぶっちゃけ」、「やばい」は1名で、ほとんどの学生がこれらのことばは話し言葉であり、修正が必要であるとしている。接続詞としての使用が多い「でも」「けど」「なので」などは、使用している人も多く、話し言葉であるという認識が薄いのであろう。反対に強調したり、感情を表すときに使用する「めっちゃ」「マジで」「やばい」などは、話し言葉であるという認識が強いようである。

一人称の⑱「自分」㉔「僕」も使用頻度の多さからか、書き換えが必要であるという認識が薄いようである。文化庁の調査によると、⑰「私的」は 44.1%が使うことがあると答えた。[5] 本学の学生は47.1%が書き言葉であると認識していた。

ら抜き言葉の㉒「着れる」㉓「食べれた」を「修正なし」、つまり、書き言葉であると答えたのは、「着れる」が38.6%、「食べれた」が24.2%と多い。文化庁の調査でも「食べられ」たの使用は41.7%、「食べれ」たは48.8%が使用している。[6]「修正あり」と答えた中で32.9%が「着られる」、31.8%が「食べられた」と書き換えができた。

最近よく耳にする⑰「あり」という表現は39.3%が書き言葉であるという認識である。話し言葉であり修正が必要だと思っている学生でも、37名中21名の56.8%が書き換えがわからないと答えた。この表現の修正は文脈をしっかり見ないと難しいので、「書き換えがわからない」というのは、学生の正直な気持ちであると推測される。

今回の調査で使用した表現の45個が、すべて書き言葉への変換が必要であるとわかったのは4名のみであった。その中でも45個のほとんどを変換できたのは1名であった。この学生の調査結果は（1）話し言葉と書き言葉の区別はついている。（2）相手に失礼だと思うから、相手によって言葉遣いは変える。（3）読書は習慣的にしている。（4）1年間で10冊読んだ。（5）新聞は週に1～2日読む、であった。この学生においては、話し言葉と書き言葉の区別、その変換ができたことと、読書量との関係性があるとは断言はできない。

今回の調査結果から、問題点をまとめておく。

・話し言葉の表現には比較的気づけているが、修正する際に表現によっては書き言葉専用の表現までには達していないものもある。

・修正する際、書き言葉に変換する表現の候補はあるが、文脈にあう表現を見分ける・分別することが難しい。

単に書き言葉という表現があまり身近ではないということも考えられるが、変換することに不慣れである面もある。話し言葉の表現に気づくことはできるが、修正する際にどのような表現にしたらよいのかわからない。あるいは、深く吟味せずに思いついた表現を選んでしまう傾向にあるようだ。話し言葉と書き言葉の区別はできても、修正する際に文脈にあうものを考えたり、「実証的かつ体系的に示すことはかなりの難事業である」（石黒、2011、p16）。修正する際、単にその表現しか知らないのか、あるいはいくつか

の候補からその文脈にあった表現を考えるのが面倒なのかもしれない。いずれにせよいくつもの候補から吟味できるような、学生自身の表現力を身につけさせることが必要である。

４、まとめ

調査結果からも示されるように、話し言葉と書き言葉の区別がついていない、もしくはついていないかどうかもわからない学生が 67.2%いる。話すときには相手によって言葉遣いを変えると全員が答え、文章を書くときに言葉遣いを変えると答えたのは 79.4%であった。書き言葉の認識や修正に対する意識があることはわかる。しかし、読書習慣と読書量の少なさ、新聞閲読の習慣のないことから考えれば、読書と、話し言葉と書き言葉の区別との因果関係は、少なくともあるのではないかと考えざるを得ない。

日常的な読書習慣や新聞閲読習慣がないということは、読書や新聞を通して書き言葉に触れる機会がないため、話し言葉と書き言葉の区別はついても、修正する表現が出てこない、もしくは、その候補が少ないと考えられる。

保育者をめざしている学生には、自身の言動がつねに子どもの見本となることをもう一度意識づけさせ、言葉はとくに子どもの身近にいる保護者や保育者の影響を大きく受けるので、保育者としての立場をしっかりとわきまえ、日常での話し方に注意を払うように導くことが必要である。新聞を閲読すること、読書をすることにより、知識を身につけることはもちろんのこと、日誌や指導案を書くうえでも必要な、多様な言葉や表現を知り、使えるようになるために、言葉に敏感になり、多様な表現の見分けや使い分けができるような指導を継続していきたい。

謝辞

本研究にご協力いただいた学生の皆様に心より感謝いたします。

注

１）文部科学省　小学校学習指導要領　「第２章　各教科　第１節　国語」「第２　各学年の目標及び内容」「第５学年及び第 6 学年」「２　内容」「[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]」「（１）「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」及び「C 読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。」「イ　言葉の特徴やきまりに関する事項」(ア)

２）文部科学省　中学校学習指導要領　「第２章　各教科　第１節　国語」「第２　各学年の目標及び内容」「第２学年」「２　内容」「[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]」「（１）「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」及び「C 読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。」「イ　言葉の特徴やきまりに関する事項」（ア）

３）全国大学生活協同組合連合会 (2016)　「第 51 回学生生活実態調査の概要報告」

「３．日常生活について（１）勉強時間・読書時間・スマートフォン利用時間」

４）日本新聞協会広告委員会（2016）「2015 年全国メディア接触・評価調査」「Q３－１（１）閲読頻度（朝刊）」「15－19 歳」　今回の調査は本学 1 年生を対象としたため、年代別「15－19 歳」の調査結果を用いた。以下の５）・６）も同様に 18・19 歳が含まれる調査結果を用いた。

５）文化庁（2015）「国語に関する世論調査」「４　言い方の使用頻度について」（16～19 歳）

６）文化庁（2016）「国語に関する世論調査」「４『ら抜き』，『さ入れ』，『やる/あげる』」（16～19 歳）

参考文献

１）石黒圭、橋本行洋編（2014）『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房

２）石黒圭（2011）「話し言葉と書き言葉―初年次教育の基礎資料として―」一橋大学紀要「言語文化」第 48 号　pp. 15－35

３）木田真理、柏野和佳子（2014）「『書き言葉的』として指導する必要のある語の分析―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用して―」国立国語研究所　第 5 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集　pp. 293－300

４）栗原優（2007）「新聞記事に見られる『書き言葉』と『話し言葉（口語）』の混同についての一考察」文化情報学　第 14 巻第 1 号　pp. 39－43

５）佐藤達全（2013）「保育科学生に対する作文指導の目的とその結果について―『日本語の表現法』と『保育者論』の授業を通して―」育英短期大学研究紀要第 30 号　pp. 95－109

６）佐藤達全（2014）「保育科学生の文章表現力低下の原因と対応―日本語表現法の課題文と実習日誌を中心にして―」育英短期大学研究紀要第 31 号　pp. 57－71

７）林由紀子、松原茂樹（2007）「自然な読み上げ音声出力のための書き言葉から話し言葉へのテキスト変換」情報処理学会研究報告音声言語情報処理（SLP）第 47 号　pp. 49－54